

三重大学・志摩市 文化フォーラム 2010

～里海に生き、里海に学ぶ～

どなたでも参加できます
事前申込不要・参加無料

開催日 平成22年①11月17日(水)、②12月1日(水)、③12月15日(水) (全3回)

第1部 講演 19:00～20:20 / 第2部 討論 20:20～21:00

場所 志摩市阿児アリーナ・ベイホール

会場が志摩市役所から阿児アリーナに変わりましたのでご注意ください。

三重大学と志摩市は2005年より文化フォーラムを開催しています。今年のテーマは「里海」です。志摩市民にとって暮らしの場である英虞湾や矢野湾を豊かな自然環境を育む「里海」ととらえ、里海をどのように生かせるか？里海から何が学べるのか？暮らしと環境は調和できるのか？など、三重大学の教員と市民の皆様が多様な角度から意見を交換できる場を持ちたいと思います。全3回、3つのテーマを通して、里海と市民の暮らしを考えるきっかけにいただければと思います。ぜひ、ご参加ください。

1 『里海とはどんな海？～豊かな自然環境から学ぶこと～』

11月17日(水) 19:00～21:00

司会 下川 元三 (伊勢志摩総合研究所代表)

講師 前川 行幸 (生物資源学研究科教授)

講師 荻原 彰 (教育学部教授)



2 『私たちにできる里海づくり～暮らしと環境との調和を求めて～』

12月1日(水) 19:00～21:00

司会 伊藤 芳正 (横山ビジターセンター事務局長)

講師 高山 進 (生物資源学研究科教授)

講師 吉岡 基 (生物資源学研究科教授)



3 『里海が私たちにもたらすもの～環境調和と生物多様性』

12月15日(水) 19:00～21:00

司会 浦中 秀人 (志摩市産業振興部水産課)

講師 朴 恵淑 (人文学部教授)

講師 吉松 隆夫 (生物資源学研究科教授)



定員 約300名

問合せ先

- ・三重大学附属図書館研究開発室
TEL 059-231-9072
- ・志摩市企画部企画政策課
TEL 0599-44-0205

主催：三重大学・志摩市
協賛：中部電力(株)
後援：志摩市商工会、(株)三重ティーエルオー



文化フォーラム 2010

『里海とはどんな海？～豊かな自然環境から学ぶこと～』

第1回
11/17
(水)

前川 行幸 (生物資源学研究科教授)

「アマモ群落の修復を通じた内湾環境の再生について」

アマモ場は、海域環境の浄化や水産資源の確保に大きな役割を果たします。英虞湾では、アマモ場による堆積汚泥の浄化と人工干潟・藻場造成による浄化能力向上に取り組んでいます。環境保全と地場産業を調和させる内湾環境の再生について紹介します。

荻原 彰 (教育学部教授)

「里海を活かした環境教育の可能性」

里海は川、山、人里と共に自然と文化が分かちがたくむすびついた一つの複合体を形成しています。この里海複合をより豊かで持続的なものにするために、教育の場でできる事を環境行動というキーワードを中心に考えます。

『私たちにできる里海づくり～暮らしと環境との調和を求めて～』

第2回
12/1
(水)

高山 進 (生物資源学研究科教授)

「生物多様性条約の視点から志摩市里海事業を考える」

10月に名古屋で開催される生物多様性条約の目的は、①生物多様性の保全、②その健全な利用、③利益の公平な分配、の3つです。この3つの目的を一体のものとしてとらえる見方は、ちょうど「里海」の理念と一致します。この視点から志摩市の事業の重要性を述べようと思います。

吉岡 基 (生物資源学研究科教授)

「志摩の海への期待～東京から三重大に赴任した水産系一教員の視点から～」

17年前、15年間住んだ東京から大学教員として赴任しました。当時の大きな期待は、そこに海があるということでした。一教員の立場で、あるいは学生達が三重や志摩の海をどのように見て、何を期待しているのか、そんな話題を提供したいと思います。

『里海が私たちにもたらすもの～環境調和と生物多様性～』

第3回
12/15
(水)

朴 恵淑 (人文学部教授)

「地球温暖化・生物多様性の接点と志摩の持続可能な里海づくり」

地球温暖化により、地球上の生き物は年に約4万種が絶滅していると言われ、生き物が生存できなくなる現状に直面しています。1997年の温暖化防止京都会議(COP3)と2010年の生物多様性愛知・名古屋会議(COP10)の接点を探り、志摩の持続可能な里海づくりに向けて、私たちは何をすべきかを考え、それぞれの役割を探りたいと思います。

吉松 隆夫 (生物資源学研究科教授)

「環境に優しい水産養殖技術」

水産養殖は、地球の食糧問題を解決する上で重要な役割があります。ところが環境に対する悪影響など、ネガティブなイメージも依然残っています。それらを払拭する、環境に優しい養殖技術の新しい取り組みを紹介します。